

ライトによって拓かれた大谷石文化の近代①

宇都宮美術館 専門学芸員 橋本優子

近代建築の四大巨匠といえ、ワルター・グロピウス、ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ、ル・コルビュジエ、そしてフランク・ロイド・ライトが挙げられる。このうち、来日が数回に及び、わが国に複数の作品を遺したのは、アメリカ人のライト〔1867～1959（慶応3～昭和34）年〕だけだった。ライトの日本初訪問は1905（明治38）年で、この時は、わが国の古美術と美術工芸品の調査・収集、伝統的な建造物の探訪を主な目的としている。その後、1913～22（大正2～11）年の間、日米を何度か往復し、東京に事務所も設けて6つの国内案件を実現させた。

日本におけるライトの業績のなかで、最も意義深い建物は、1923（大正12）年に竣工の「旧・帝国ホテル ライト館」¹⁾であり、私たちの地域とも縁が深い。というのも「ライト館」は、近代建築としては初めて、意匠・構造の両面で大谷石を効果的に用い、この類稀な作品なくして「大谷石文化の本質」は、国内外の人々に可視化・共有されなかったからだ。

往年の姿をとどめる「自由学園 明日館」²⁾〔竣工1921～25（大正10～14）年〕、「旧・山邑家住宅」³⁾〔竣工1924（大正13）年〕もまた、それぞれの用途に見合った独自の様式の名作と評せられ、「ライト館」と同じ採掘場の石が使われた。ライトの片腕だった遠藤 新の「自由学園 講堂」⁴⁾〔竣工1927（昭和2）年〕についても同様である。これらの現場に供した石山こそ、今から100年前の1919（大正8）年、つまり「ライト館」の着工とともに拓かれた「旧・東野採掘場」⁵⁾に他ならず、大谷地区では「ホテル山」という名称でも知られてきた。

ライトがいかにして大谷石を見出し、採用するに至ったかは、類推の域を出ない部分も多い。だが、少なくともわが国の凝灰岩⁶⁾に魅了され、その特質を「近代の精神」と融合させたのは確かと言える。

興味深いのは、ライトは当初、大谷石ではなく、「菩提石」という別の凝灰岩を「ライト館」の石材として思い描いた点だ。かつて石川県江沼郡那谷村菩提⁷⁾に産し、暗褐色もしくは黄褐色の素地に、無数の黒い孔が不規則に並ぶ武骨な石で、あたかも蜂の巣を思わせるため、「蜂ノ巣石」とも称された。大谷石と同様、当時の実用的な専門書『本邦産建築石材』⁸⁾で取り上げられ、その記述を読むと、同じ凝灰岩でありながら、両者はかなり異質なことがよく分かる。

本書の編纂が大蔵省により、1921（大正10）年に発行されたところにも留意されたい。すなわち、竣工から二ヶ月も経たないうち仮議事堂が炎上〔1891（明治24）年〕、激動する世の中に翻弄されたまま、計画が頓挫してきた国会議事堂⁹⁾〔竣工1936（昭和11）〕の建設に向けて、国を挙げて行われた石調べの成果がこの本だった。調査は1908～12（明治41～大正1）年の四年に及び、その報告・分析となる本書は、石材の性質、産地の状況、化学的・物理的な試験結果に加えて、豊富な図表と画像を収録し、微に入り細をうがった内容を呈する。

集められた資料は、帝国ホテルの仕事で来日を重ねたライトの耳目に触れる。石材サンプルを含め、国家機密にも等しい情報の密かな提供者は、ライトの起用に奔走した帝国ホテル総支配人・林^{はやし}愛作^{あいさく}だったという。その頃の帝国ホテルは、劣化・古めかしさが拭えない旧館¹⁰ [竣工 1890 (明治 23) 年] を補完する建物の必要に迫られ、かつ新館 [ライト館] の工事が始まった 1919 (大正 8) 年に別館¹¹ [竣工 1916 (大正 5) 年]、三年後の 1922 (大正 11) 年には旧館まで灰燼に帰す奇禍が続く。よって、議事堂と同じく「国の顔」となる施設の実現を目ざし、ライトに囿られた内々での便宜は疑いようもない。

ともあれライトは、西洋建築で多用され、わが国にも産する花崗岩¹² (かこうがん) や大理石¹³ (だいにせき) を選ばず、これらに比べると軟質・軽量、脆弱だが採掘・加工が容易で、大小の孔や粒子、斑などを有し、ざらざらとした、あるいは粉っぽい質感の凝灰岩に目を向けたのだった。換言すると、石よりも土に近い特性、素朴な味わい、日本各地で採れ、種類に富むこと、産地に於ける土着的な利用——地域文化との接点、ひいては「日本らしさ」に惹かれた、として良いだろう。

菩提石から大谷石への変更は、実際的な理由に負うところが大きい。まさに 1919 (大正 8) 年の政府調査¹⁴ によると、菩提石を 1 とするならば、大谷石は坑区面積で 70 倍、総埋蔵量 6,000 倍、年産出量 6,250~7,143 倍、従業員数 18 倍、また、産地から東京までの輸送距離・手段も、前者は菩提村~荷馬車 8km~北陸本線「動橋^{いぶりばし}駅」~官営鉄道 580km~旧・山手貨物線「大崎駅」、後者が「立岩^{たていわ}駅」「荒針^{あらはり}駅」~宇都宮石材軌道・軽便鉄道 9.2km~日光線「鶴田駅」~官営鉄道 120km~旧・山手貨物線「大崎駅」と、大谷石の利点は言わずもがなである。

ライトによる大谷石建造物は、こうして世相・産業面の「日本近代」とも不可分の関係で生み出された。——その意匠と構造、影響力は、次回の連載で考察する。

(注)

1. 玄関部分を移築・公開。国登録有形文化財「博物館明治村 帝国ホテル玄関」、愛知県犬山市内山。
2. 現存・公開。国指定重要文化財「自由学園 明日館」、東京都豊島区西池袋。
3. 現存・公開。国指定重要文化財「ヨドコウ迎賓館」、兵庫県芦屋市山手町。
4. 現存・公開。国指定重要文化財「自由学園 講堂」、東京都豊島区西池袋。
5. 現在は廃坑・非公開。栃木県宇都宮市田下町。
6. 大分類では、火山に由来しない岩石片、マグマ以外の火山噴出物、生物の遺骸・破片、化学成分、これらの混合物が水中や地上で沈積・固結した「堆積岩^{たいせきがん}」、中分類は、マグマ以外の火山噴出物が堆積した「火山碎屑岩^{かざんさいせつがん}」、このうち火山灰や軽石^{かるいし}がゆっくりと押し固まった岩石を指す [岩石>堆積岩>火山碎屑岩>凝灰岩]。
7. 現在の石川県小松市菩提町。
8. 『本邦産建築石材』(大蔵省臨時議員建築局, 1921 年)
9. 現存・公開 (現・国会議事堂)。設計=大蔵省臨時議院建築局、東京都千代田区永田町。

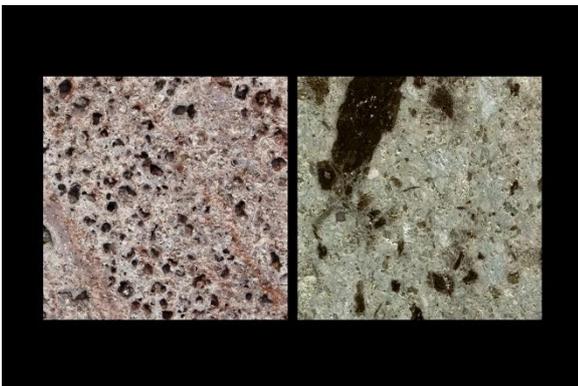
10. 旧・帝国ホテル 本館（焼失）、設計＝渡辺 譲^{ゆする}。
11. 旧・帝国ホテル 別館（焼失）、設計＝フランク・ロイド・ライト。
12. 大分類では、マグマが冷えて固まった「火成岩」、中分類は、マグマが地下の深い場所でゆっくりと固まった「深成岩」、このうち石英と長石を主成分とする岩石を指す〔岩石＞火成岩＞深成岩＞花崗岩〕。国産の石材としては、御影石〔兵庫県神戸市〕、稲田石〔茨城県笠間市〕などが知られ、堅牢で磨くと光沢を示す。
13. 大分類では、マグマの熱、高圧や高熱で変成した「変成岩」、中分類は、浅い地下でマグマの熱変成作用を受けた「接触変成岩」、このうち炭酸カルシウムの沈積・固結による堆積岩〔注6参照〕の石灰岩が、熱変成により再結晶化した岩石を指す〔岩石＞変成岩＞接触変成岩＞大理石〕。国内では、岐阜県大垣市や山口県美祢市^{みね}で採れ、緻密で磨くと光沢を示す。
14. 『本邦産建築石材』〔注8〕に基づく。



フランク・ロイド・ライト「旧・帝国ホテルライト館」
写真集『帝国ホテル』より、正面中央入口/撮影 1923/
宇都宮美術館蔵

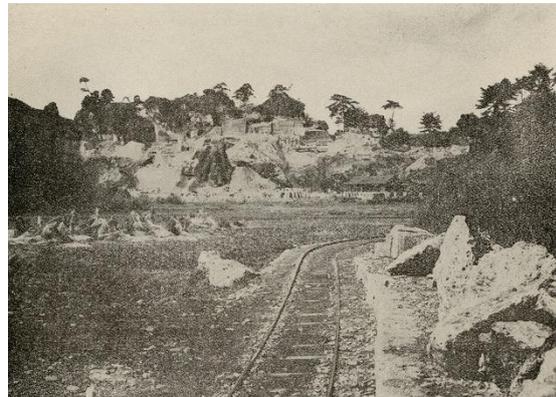


旧・東野採掘場。山の神の石祠の後ろに、かつての
石山の名残を眺める
筆者撮影/栃木県宇都宮市田下町



[左]菩提石[右]大谷石（荒目）

筆者採集・撮影/採集地：石川県小松市菩提町（菩提石）
栃木県宇都宮市大谷町（大谷石）



大正時代の^{大正}大谷風景

『本邦産建築石材』より、栃木県大谷石産地
撮影 1915～19年頃/宇都宮美術館蔵